参考資料１

北陸圏における真にくらしやすい連接型都市圏形成の推進調査

第1回調査検討委員会　発言要旨

■日時:平成 21 年 3 月 6 日　13:00～

■場所:石川県勤労者福祉文化会館　2F　ホール1

■出席者

高山純一(座長)／金沢大学大学院　教授

上村靖司／長岡科学技術大学　准教授

羽根　由／株式会社　生活ネット研究所　代表取締役社長

水上靖仁／北陸経済連合会　事務局長

高嶋公美子／NPO 法人ナレッジふくい　理事長

山田外志雄／石川県企画振興部企画課　担当課長

野路博之／福井県総合政策部政策推進課　主任

宮山浩一／総務省北陸総合通信局情報通信部　情報通信振興課長

上手研治／国土交通省北陸信越運輸局企画観光部　企画観光課長

飛田潤一／国土交通省北陸地方整備局企画部　広域計画課長

■議事

1. 座長挨拶

・ 自身がかかわってきた、広域地方計画、安全安心な暮らし分科会の検討においては、大きく北陸を捉え特徴を把握したうえで、計画の性格上総花的にまとまらざるを得ない。

・ これらを、一つでも具体化するプロジェクトが今後必要と認識

・ 今回の検討が一歩でも前進する機会であり、専門の立場からいろいろな意見をちょうだいしたい。

2. 議事 (1) 検討の進め方

（山田委員）

・ この調査と広域地方計画の広域連携プロジェクト（連接型都市圏形成）との関係、検討会の役割は。

⇒広域連携プロジェクトで整理したものを磨き上げていくことが本来の位置づけとなるが、現段階でオーサライズされている状況にない。今回の調査では、広域地方計画で踏み込みにくい施策についても幅広く取り込みそれらの扱いを社会実験等による検証など深堀の方向性を整理することと考えている。

3．議事(2)特徴･検討の方向

（野路委員）

・ 今回の調査の着地点をどこに置いているのか。

⇒今年は、３つのテーマに基づく課題を提示して実際に検証してみないと実現可能かどうか判らない「課題」を明らかにできればいいと考えている。その課題を実際に検証することは、来年度に実施を考えたい。

（水上委員）

・ テーマは全て大切。最終目標は、三大都市圏や海外も含めてそれらの人々を如何に呼ぶかと考える。従来のコナベーションはメガロポリス的発送だが、北陸のそれは、これまでにない連接都市として人々を呼び込むことが出来たら良い。いろいろな「強み」があることをうまく結びつけて首都圏や外国に発信していくといったような戦略が明確にあってその上でどのようなモデルを行うのかといった展開が必要。

（高山座長）

・ 各県の取組み施策のまとめは良い成果となっている。これに、NPO や経済界の取組みについても合わせて整理し、地域毎の濃淡を指摘することが有効ではないか。（連接の施策も含めて。）

（上村委員）

・ テーマで見ていくと、「豊かな暮らし」と「連接型都市」の関連が見えない。「連接型」は新幹線整備をふまえてと言う意味で理解出来る。が、ここと「真に暮らしやすい」とのつながりが難しい。

・ 「連接型」の解釈としては、他の地域から見た場合の都市の連接している形が見える。一体となった圏域構成から何らかの価値観を醸成していこうとすることは理解出来る。

・ 一方、連接していることの意味としては、お互いの機能を補い合うことができることや防災面からの補完機能といった、外から見た場合の連接と中から見た場合の連接といった観点から深堀すると見えてくるのかもしれない。

・ 新潟–長岡間は高速バスの料金並みの S 切符で往復が可能なため通学圏になっている。また山形–仙台間で同様の仕組みにより新たな価値観が生まれている。

・ 連接と暮らしやすさはあえて一体と考えず個別に考えて結果として共通項が見つかるくらいの割り切りも必要。

（高山座長）

・ K-CAT という勉強会で新幹線開通に伴う地域間連携についてどのようなことができるか、また地域の暮らしはどのように変わるかについて議論したことがあり、東京から日

帰りできるようになることとわせて、富山–金沢間が 15 分で移動できるようなると、アフター５の暮らし方にも大きく変化する。時間的に近接する事でそれぞれの個性を交流で連携し活性化につなげる事が出来るのではないか。機能を分担することが有効であるとした場合にとのような分け方があるのかを考えることも有効である。

（水上委員）

・ コミュニティ単位の強みを活かした取組みを上手にコーディネートして発信していくことのできる仕組みづくりが根底のコンセプトには必要。今大事にしないと行けないのは、コミュニティの崩壊に直面しているようなところをきっちりやっていく事が防災や観光を含めた全てのベースになると考える。

（羽根委員）

・ テーマ２とテーマ３は共通点がある。富山では、農山村の作物を地域で販売している集会所の様な場所に女性が沢山集まっている。子育て世代が気にしているのは安全な食を確保することを意識している。北陸は安全な食を提供できる地域としての認知度は高く、中山間地域の人々との連携は安全な食をキーワードに結びつく。また新幹線を使って安全でおいしいものを食べにいくといった事が出来れば３つのテーマはまとまるのではないか。

（高島委員）

・ 北陸新幹線の話を聞いた時、福井から人が流出する危惧を実感した。福井のテーマとしては、いかに多くの人に来てもらうかであり、福井の弱みはマイナーであること。積極的な PR が必要。

・ 福井の水害、能登半島地震をはじめとする地震災害の時に困った点として、透析患者が透析を受けられなくなった事。そのため、災害時にも透析を受けられる様、県域を超えたネットワークを構築する必要があるとの認識に基づき、透析患者の支援グループによるネットワークづくりがはじまった。医療、また要支援者を含めた広い範囲での生活の安全で安心な対応を充実することで、子育て世代に限らず高齢者も含めて北陸の魅力とすることができるのではないか。

4. 議事 (3) モデル地区の設定

（山田委員）

・ 中山間地域の課題としては、現状を維持するだけではもう持たない状況にある。そういった中で、能登の様々な地域で定住に向けた多くの取組みを実施しており、そういった取組みを盛り込んでいってはどうか。

・ 地区に限った施策を洗い出すのではなく、多様な取組みについて整理し施策ベースでモ

デルと仕立てていく事が重要。

（野路委員）

・ テーマ毎に地域をしぼると言う事ではなく、各県バランスを考慮してテーマ毎に設定するというようなことも検討できないか。

・ 近接性には２つの視点がある。１は都市と都市の近接、２は都市と農山漁村の近接。高齢者や農村の問題を考えるときに、都市と近接しているところに限界集落があるというのが北陸の特徴。近接したところにある限界集落支援の方策が北陸らしいモデルの選定になるのではないか。

・ 福井県の施策では、来年度から集落支援員を置く事を検討している。限界集落でのヒアリングを通して実感するのは、実際の限界集落では達観しており、特に困ったと言うことは聞かれない。一方、限界集落となる一歩手前の地域のほうが問題が大きく、北陸の近接性と言う面を農村対策に生かせるといいと考えている。

（上村委員）

・ 中山間地域を例にとっても、厳しい状況の中で様々な取組みを実施しており、こうした取組みの中から良いものを整理することが必要ではないか。マイナスを 0 に近づけるのでは十分ではなく、それを如何にしてプラスに転換するかが重要となっている。

・ 良い事例について照会をかけ、それを整理するだけでも非常に有意義。

・ 調査をかける部分と、社会実験の対象をイメージしている地区とは区分して整理してはどうか。

（高山座長）

・ 地域生活交通では、運輸局で整理しているデータを参考に地域でどのように取組んでいるか、検討されておりどのように動いているかを把握することは可能。それぞれの地域では、まさに生活の足を確保することが切実な状況にあり、国の支援を活用していることもあり頑張っているところもあるので整理ができる。

・ 一方で、安全・安心の視点からは、医療、災害時、雪に対しての支援は自治体が中心となっている事もあり、国の支援の形が判りづらい。そういった面から、雪問題に対して、国や県が支援していく方策を提案することもあるのではないか。

・ 子育てに関しては、周産期の状況に関して整理すると地域によって安心して生む事ができる地域とそうでない地域の違いを明らかにし、周産期に不安のある地域ではどのような対策を講じたら良いのかの整理が出来るのではないか。そうした対策が子育て世代への魅力付けとなる。

・ 調べることはまだまだ沢山あり、課題としてまとめればならないことが山積していることを示すだけでも成果になるのでは。

（宮山委員）

・ 総務省の取組みとして、地域 ICT 利活用モデルとして、総務省と厚生労働省、経済産業省で懇談会を立ち上げ、モデル地域を選定し遠隔医療に関するモデル事業を実施し、今年度穴水町で実施。南砺市では、医師のいない中山間地域において中心市街地の病院と ICT をつないで TV 会議システムで診察、診断ができないかといった取組みを実施している。

・ 穴水町では、町立病院と診療所をネットワークするとともに、金沢医科大病院ともつなぎ遠隔医療が出来ないかと言ったことを実施している。

・ これも南砺市の取組み事例だが、テレワークの活用について平成 19 年から実施している。目的は「定住」を促進するものとして考えており、富山県に住まいながら東京に居住しているのと変わらない仕事の環境を提供出来ないかといった視点で取組んでいる。テレワークやテレビ会議システムでは、セキュリティの問題がありその点も検証を考えている。

・ これらの取組みは各自治体の取組みなので、調査に関しては相談してほしい。

（上手委員）

・ テーマ毎の対象が連接は勤労者、中山間は高齢者、働く女性は都市圏といった固定観念があるようである。決して間違いではないが定住などの広がりを検討しようとするならば、全ての地域で全ての観点を落とし込んだ方が新しい取組みのヒントが出てくるのではないか。

・ 例えば女性の就業率で見ても、市レベルで見ると実際そうなのかもしれないが、合併もあり、市の中を見るとエリア毎に空白地のようなものがあり、住んでいる人たちにとって特徴的な取組みがあるのではないかと思う。

・ 事業者さんの取組みで「子育てタクシー」といったものがあり、子供の送り迎えをタクシー事業者が行う例もある。こういったサービスを活用することで、市街地部に住んでいない人も子育てが容易になるといった事も考えていくことができるのではないか。

・ モデル地区を設定して取組み施策を検討すると網羅しきれない部分が取り残される危険性がある。

（高山座長）

・ 統計データだけで判断すると地域の特徴をカバーしきれない危険性は回避する必要がある。

（水上委員）

・ 連接都市の視点として都市の比較を考えている様だが、北陸では、兼業農家が多くコナベーションというよりも田園都市と言った方が良いくらいの実感。対象の比較内容にも

よるがその辺りは配慮が必要。

（高山座長）

・何を目的に比較するかを明らかにした上で実施する必要がある。

（上村委員）

・ 「連接型」と「暮らし」をどう関連づけるかがよく見えない。

・ 「連接型」を拡大解釈し都市部と農村部の「近接型」と捉えると、北陸圏の圏域は３０分圏にほぼ収まっており、そこに中山間地域や豪雪地域、条件不利地域が存在する。30 分移動するだけで、ドラスチックに状況が変わる地域である。そこにテーマ２が関わってくる。中越では震災をきっかけに「子育てサークル」が中山間地域の農地を手伝う仕組みもあり、子育ての豊かな環境もこの 30 分圏に存在する。30 分圏内に様々な要素がそろっているということで整理すると、つながってくるのではないか。

（高山座長）

・ 今の意見で、３つのテーマがまとまる。切り口は異なるが、細長い圏域にあって、30 分圏域に全てが収まっている。その中で、地域特性が網羅しているといった整理でまとめてみてはどうか。その際、どう切り分けるかが課題にはなる。

以上